

巧妙に行われる「思想改造」

「QCサークル活動」のねらい

このQCとは、「Quality Control」の略で、「品質管理」を指し、QCサークルとは、「同じ職場内で、品質管理活動を自主的に行う小グループ」のことです。この活動の基本理念は、「人間の能力や無限の可能性を引き出し、働きがいのある明るい職場をつくり、会社発展に寄与する」といったもので、わが社においては、この時期に活発になるJRK活動がその最たるものです。自主的に集まり知恵を出し合い、その「創造力」をもつて業務改善、会社発展に貢献する、と聞く響きは良いですが、ここで言う「自主性」や「向上心」、「創造力」等は、すべて「会社の利益」のためにあるが故に賞賛されるわけで、裏を返せば、会社発展に繋がらない場合、それらは余計なものとして雑に扱われます。ご存じの通り、わが社の場合、人件費等のコストを削りに削ることで「利益」を上げていることから、単に、会社の合理化の片棒を担ぐ事こそ「利益」に貢献することを意味しており、最も恐ろしいのは、「労働環境は会社がお金をかけて改善するものではなく、社員自身の『努力』によって改善していくものである」という間違った認識を持たされてしまうところにあります。

「不安定輸送」を生んだ背景

ここ数年、「異音感知」による列車遅延が頻発しています。しかも、その大半が乗客からの「変な音がする」といった申告を受けての非常停止手配によるもので、これは他でもなく、安全至上主義であるわが社の方針です。事の発端は、過去に新幹線「のぞみ号」、特急「ソニック号」で走行中に機器破損が生じたことですが、この事象で真っ先に問題にすべきだったのは、「車両に異常が発生したこと」であり、これを機に本来なら、車両の点検、整備要員を増やし各車両の機器を新しくする等、コスト面での見直しを行わなければなりません。しかし、実際は、「乗務員が列車を止めなかつたこと」ばかりが問題視され、その結果、連結器音や空調音等に過敏に反応した乗客の一声で列車が止まるといった公共交通機関としてのあり方を疑わざるを得ない状況になっています。「お金をかけていない車両は、何が起きてもおかしくないから、とりあえず列車を止めなさい」というわけですね。こうした「責任転嫁」が可能な状態こそ、各種活動の最大の功績と言えるでしょう。

会社は、安全のためなら「空振り」でも結構と言いますが、こちらは、目隠し状態でのフルスイングの空振りを強いられ、恥までかかされ、いい迷惑です。



航空会社が同じような「安全対策」をしていたら、間違いなく潰れるよね。



第 178 号

2023年 9月1日

発責 国労九州本部

博多区博多駅東3丁目9番3号

ニッコーハイツ1003号

NTT 092-483-1515